

消費される児童像

—徳田秋声の少年少女小説

西田谷 洋

The image of a child is consumed
—Shusei Tokuda's stories about boys and girls

NISHITAYA Hiroshi

E-mail: nisitaya@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

In this paper, we consider how Shusei Tokuda's stories about boys and girls consume and represent the image of a child from perspectives of didactic rhetoric with animals and plants, the principal of gospel in "Menashigo", the adventurous structure in "Meguriai" and action of making no lessons between two stories.

キーワード：徳田秋声，児童，イメージ，表象，消費

keywords: Shusei Tokuda, child, image, represent, consume

1 はじめに

児童文学を登場人物／対象読者が児童とされる文学と緩やかに規定するとしても、児童がいかなる存在として見出されるかによって、その描かれ方はさらに異なる。成長過程にある児童に対して、大きな大人の知・技法を注入すれば大人になるという範例主義的な捉え方と、発達段階独自の知・技法に応じた教育によって児童から大人への飛躍がなされる捉え方は対照的であるが、いずれにせよ、そうして児童が描かれ見出されることは児童が表象上のイメージであることを意味している。

自然主義作家・徳田秋声は、児童文学黎明期に少年小説・少女小説・児童文学をいくつか発表しているが、同様に子供が表象上のイメージとして形象・操作されることを示している。

子供は書きにくい、自分一人の経験ばかりでなく、誰でもさうらしい、随って子供を巧みに書いた作品は日本にはあまり無い様だ。大抵好い加減にかいてある。芝居に出る小児は皆恐ろしくませて大人化しているが、小説の子供も矢張さうだ⁽¹⁾。

それらは『赤い鳥』掲載作品のように代作が伝え

られているものもあり⁽²⁾、ここでは読者が秋声作としてイメージするものを取りあげる。それらの多くは短篇だが、長編も児童文学執筆後期にある。

ほぼ唯一と言って良い十文字隆行氏の先行論では、秋声の少女少年小説をジャンル面から動植物もの・女性像・為政者像・成長ものに整理し、秋声の成長とは「自意識の成熟によるのではなく、家族の解体によって否応なく孤立させられてゆく⁽³⁾」と指摘している。

また、秋声の少女少年小説の多くは、教訓性を伴っている。範例主義は教訓を注入することで小さな大人である少年から大人への連続的变化を志向する。このとき、それらの短篇で見られる擬人法的な比喩は、教訓のための事例や世界観を提示するものと言えよう。一方、児童の無垢さ、思考力や知識の弱さは、教育する大人にとって教育するべき方向性を喚起する。一方、家庭は革新の場ではなく忍従の場であり、主人公である児童は、献身、自己犠牲、忍耐を強いられ、片親であったり貧困に陥りがちであることが多い。そうした欠損としての少女少年は、大人とは異なるものであるが、それが成長を示すとすれば、大人の他者として大人のあるべき方向性を示唆することにもなる。

すなわち、秋声の少女少年小説、児童文学におけ

る成長物語・教訓物語、あるいは悲劇物語とは児童という異なるものを語ることでわれわれ大人のアイデンティティを語る物語なのではないだろうか。ここでは、児童像は表象として消費されていくのである。

本稿では、秋声の少女少年小説を概観し、少女・少年がいかに表象されることが目指されているのかを検討する。そこで、第二節では動植物ものの教訓的なレトリックが児童をいかなるものとして表象するかを整理し、第三節では翻訳もの大作「目なし児」のストーリーである福音主義が児童像をいかに消費しているかを検討し、第四節では一見教訓性が消失していくなかで維持される構造を見だし、第五節では秋声の少女少年小説末期の大作「めぐりあい」という冒険構造をもつ物語において児童の成長の意味を分析する。

なお、ほぼ児童文学前史に書かれた物語である秋声の少女少年小説では「児童」の表記は用いられていない。本稿で「児童」を用いるのは、現在の分析視角から作中人物としての彼／女らの表象を検討するための操作概念として使用するためである。

2 擬人法と教訓性

秋声の教訓的な少女少年小説は擬人法あるいは変身の特徴とするものが多い。動植物ものは、「自己抑制の必要から、分際をわきまえ狼藉を戒める禁欲的な寓話、教訓譚⁽⁴⁾」として整理されるが、改めて比喩なレトリックの類型別に教訓性を確認する。

①擬人法

「えらがり鯛鮓」(『少年世界』一八九六・四)は、面白そうだからと鯛と鮓が舟で陸に向かうが、だんだん頭痛やめまいがして舟から水に戻ると楽になり、二度と外の世界に行こうとは思わなかったという物語である。水中で生きる者が陸・空を目指し失敗するという構図は、安定した世界のままにあることを勧め、分不相応の変革を戒める。己の性質に対する無知と改善の点で擬人法の魚は子供の比喩なのである。

一方、「穉き松」(『少年世界』一八九七・二)は、小さな松が高楼大廈を支える棟木として大きな松になりたいと思うものの、飾り物として使われることを選び、数日後に廃棄されるという物語である。擬古文調も目標の棟木が大人物・英雄の比喩であり、数十年辛抱が必要と棟木の松に笑われるように、目先の利益・華やかさに目がくらむと大望をかなえられない戒めである。

秋声の少女少年小説における擬人法は人とは異なる世界での生というモデル、あるいは人では気づき得ないものを知るための手法である。

②変身

比喩である擬人法が人でないものの世界を描くのに対し、他者によってもたらされる変身は、人間とは異なるものになることで、人の世界と人でないものの世界との往還を描く。

「胡蝶」(『少年世界』一八九六・八)は、学校に行きたくない花太郎が蝶になって飛び回る夢を見たという物語である。花太郎の蝶への変化は、花々の中にいることで恍惚とし、蝶をみていると眠くなり、「蝶になったような気持がして、愉快そうに花から花へと飛んでゆくかとも思われた。併し気が注いてみると矢張旧の処に坐っている旧の花太郎」のままであり、蝶に声をかけて天の衣を着せてもらうことで蝶になる。蝶の夢を見るのは段階性があるのに対し、覚醒は冷たい風＝小川に落ちたことで一瞬に起きる。「胡蝶」では風が息をし、小川はささやき、蝶として「空へ飛び出して」風のような運動をする。蝶や風が息をし川がささやくように、風のモチーフの世界は呼吸する。異類になる夢は一時的な逸脱であり、覚醒は人間として生きていかねばならぬことも意味しよう。

「花の精」(『少年世界』一八九九・一一)は、太郎が花の精によって蝶に変化させられるが、自らの安全・命を支える花が少なく、花売りをするお秋の花畑に行くがそこは太郎自身が荒らして駄目になると花の精が倒れており、たかっていた蟻が自分にも襲いかかって目が覚めるとお秋に諭され反省する物語である。「花の精」は、「胡蝶」の発展形であり、自らの変身を望んだ「胡蝶」に対し、「花の精」では自らの意思に反して変身させられ、悪行の「因果応報⁽⁵⁾」によって苦しめられる。太郎を変身させた花の精はお秋の花畑で太郎にむしられた花に宿っているためか、お秋に似ており、消えるときに力や匂いを失い、再発見されたときも倒れている。目覚めた太郎は反省した顔でうつむくように、夢での悪行の反省が覚醒後にも継続する。

「十二王子」(『ムラサキ』一九〇五・一一～一二)は、十二人の王子を持った王が王女欲しさに女の子が生まれたら王子を全員殺すと決めため王子たちは森に隠れ住み、十年後に王女が森の十二本の百合を

抜くと王子達は鴉になり、元の姿に戻すために王女は七年沈黙しなければならず、その間王に見初められ王妃となるが、継母に讒言され処刑されそうになることを七年たって人間体に戻った王子達に救われる物語である。十文字氏は「十二王子」を「土耳其王の所望」等と共に「あるべき為政者の理想像⁽⁶⁾」を描くとする。王女の献身は報われるが、男性の主体性の回復には女性の沈黙、非主体化が必要であることを意味する。王子達が鳥に変化させられることによって、彼らが王位継承権を持っていない状態にするための呪いがかけられていることになる。

秋声の少女少年小説における変身は変身させられた主体が変身する対象の視点・経験を通して認識を改めていく手法である。その点では、「十二王子」の変身はそれとは異なり、ヒロインに苦難を与え救うプロットのモチーフの役割を果たし、むしろ長期にわたって沈黙する王女の尽力から次で見る超人のカテゴリーに含みうるとも言えよう。

③超人

超人とは人間ではあるが、変身せずとも修業・努力によって得た、人の力を超えた能力で世俗の外側から世界に働きかけるレトリックとして捉えられる。

「土耳其王の所望」(『中学世界』一九〇〇・七)は、土耳其王が贅沢に走り国民の不満が高まったので、獵師に身をやつた聖人は王宮で王に謁見し、王は触れるものが金になることを所望し、聖人はそれに応えて王が触れるもの全てを金に変える術を使って懲らしめ、王は反省し慎ましく暮らしたため土耳其の国も治まったという物語である。贅沢を反省し質素儉約を旨とする「土耳其王の所望」は、人間の物語である。しかし、触れる物質を元素変換する聖人は人間ではない。人が人ではないものとして描かれているのである。

「瘤佐市」(『時事新報文芸週報』一九〇七・一・七)は瘤持ちの佐市が勉学したいと上京する途中に、それまで取り憑いていた貧乏神を振り払い、福の神からとってもらった瘤の中の金を学資にすることができたという物語である。努力が報われる「瘤佐市」では貧乏神や福の神といった異類と佐市は会話できる点でやはり超人なのである。

超人であることが人にとって実現困難な理想を実現し、過ちを正しうる。そうした意味では、次で見る大人のカテゴリーも児童の過ちを正す段階に位置しうるのであった。

④大人

「今、今」(『少年世界』一八九六・一)は、「自分の心に非常な革命が起って、全く生れ変わったような心持ちのした」十歳の出来事を回想する一人称小説である。「今、今」は、「市民形成を目指し⁽⁷⁾」たものとされるが、その内実を検討しよう。何か指示されても「今、今」と返事するだけで何もしない「自分」が、学校を怠けて駅のそばでたこ揚げをしていると、駅長の父に見つかる。そのとき、列車の転覆事故が起きる。それは、工夫が「今、今」と、二十分余裕があると思って、レール上の障害物をそのままにしたために、一本前の十分遅れの列車が、いわば十分早く来たために事故となったのである。それを聞いて「自分」は登校する。「自分には工夫の話が明かに判ったのであった。」とあるように、「自分」は本来のあるべき行動規範に回帰することが是とされる。「今、今」の悪習に囚われる点で「自分」と工夫は同一であり、工夫は大人の「自分」の比喻である。悪習に改善できず大人で失敗する工夫と、児童でありながら反省、すなわち改善しえた「自分」が対比されていく。

①は人とは異なるものから人(児童)への写像を用い、②は①の写像を変身として具体化し、①を超人から人(児童)への写像として展開したのが③、同じく大人から人(児童)への写像として展開したのが④である。①～④の教訓性のレトリックは、いわば児童とは異なるものを用いて、正しい道へと対象人物・存在あるいは読者としての児童を方向付けるのである。そうした方向付けを行う場に位置するのは大人、すなわち成人男性である。

3 消費される天使

「目なし児」(『読売新聞』一九〇五・五・二八～六・二四)は、アメリカの盲児院で過ごすジャッケイと出会った「自分」がその天使性を賛嘆しつつもその病死を看取る物語である。

ジャッケイは、大人の多くが「女神」「天使」「神さま」という表現でその内面・外見を褒め称えている。

其手其足のむくむく肉づいて色の美しさと言ったら、全然神女でも見るようで(略)其を抱いている時の心持は、何しても天津御空から彷徨い来た美の女神が、漸く翼を収めて人の膝に憩うているとしか思われぬ。

ジャッケイは天使のように無邪気で、智慧もあって、何う見ても世間一般の子供とは趣を異にしている。

ジャッケイは少年であるが、「私」はジャッケイと初めて会ったときに少女と間違える。ジャッケイの「なの」という口調や、女性であるジャクリーンのあだ名ジャッキーに似た名前や、その美しさも少年から逸脱させる。また、「私」は男とわかった後も「神女」や「女神」とその美しさを喩え、他の人物もジャッケイに「お前さんは一体天使か女神のように見えるから」と話しかけるように、その容姿は中性的より寧ろ女性的である。現世を生きる成人男性の「私」とは対極に位置する存在として「私」はジャッケイを捉えている。

「目なし児」は原作未詳であるが、類似する傾向を持つのが、一八七〇年代の福音主義的な英米児童文学である。それらは、家族のない浮浪児が自分より年上の人間を導き、それらの人間に神の精神を教え込むプロットを持つ。ヴィクトリア朝の子供らしさのステレオタイプと理想の女性像との間には共通する点が多いのは、女性と同様に児童は、世俗の外に立ち「天上を目指す」ことで、制約のある現状と対照的な存在として教育的役割を果たすためとされる⁽⁸⁾。

天使として表象されるジャッケイは、母から「基督は我々の主だ」・「きっと神様が私たちのもとに連れて来てくれるだろうよ」と教えられ、母の元に誘う存在として神を捉えている。とすると、天国こそが待ち望む場所であり、人間世界には感情的関わりを持たないのだろうか。しかし、ジャッケイは普通の児童がするように母との死別に恐怖し、母から引き離れた女を「意地悪女」と語るように負の感情を持つ。

また、物語の前半部でジャッケイは「私」の質問に答えていき、自分のことや天国について語るのみであるのに対し、ジャッケイが病気に倒れ、病床で「私」と会話をすると何度も「私」に対して天国に自分が神に連れていってもらえるか質問する。「目の見えない」ジャッケイは神が「見つけてくれる」ことにこだわるのである。前半と後半での質問者と回答者の交替はジャッケイの神への信仰の揺らぎ・疑念を示している。語り手である「私」がただの児童であるジャッケイを天使として印象づけたいので

ある。

盲目という弱さをもつジャッケイに人々は愛しさを覚え、愛を注ぐ。弱さに慈愛の心で接することを通して「私」を含めた周囲の人物が幸福・浄化される機能がある。孤児とはその意味で周縁化された他者なのであり、天使と親近性を持つのも、現世の生を送る人とは孤絶するため無垢であるかのように描かれるためである⁽⁹⁾。

それゆえ、ジャッケイは孤児として家族制度から切り離されたまま、現世では回収されない。では、ジャッケイは死後ならば母と再会できるのだろうか。

幸薄かったジャッケイも、此に永久の安眠所を見つけて、鳥は常住其の讚美歌を唄わんがために来り、雨も嵐も其の眠りをば妨げ得ぬであろう。

しかし、「永久の安眠所」という言葉は、眠る場所という語義であり、目を開けて母と再会する展開は難しい。いわばそれは純真無垢な天使という子供像が大人によって承認・消費されるイメージであり、そうしたイメージに応え相互承認を通して生きてきたジャッケイが死んだ後は別の死者としてのイメージを割り振られたことを意味している。ジャッケイは「私」もその一人である成人男性によって消費され続けるのである。

4 非教訓性へ

本節では、「目なし児」と「めぐりあい」の間に位置する物語群を検討する。

「カナリヤ塚」(『少年世界』一九〇三・八～九)は、金持ちだが意地悪な一郎が貧乏だが優しい愛子のカナリヤを傷つけ死なせ猫の仕業と言いくるめ、しかし、カナリヤを弔った愛子は県知事夫人にその歌唱力を認められ県知事宅で育てられ何不自由なく暮らしたという物語である。愛子の歌声はカナリヤに由来するとされる物語には、優しい子は報われる、技能は貧富格差の有無に関係なく評価されるという教訓性がある。

一郎は、確かに唱歌で愛子をいじめたくとも愛子を支持する者が多くて果たせない。しかし、愛子やカナリヤへの理不尽な暴行に対して、あるいはその後の振る舞いに対して一郎が罰せられることはない。また、語り手は県知事夫人に引き取られた愛子が何

不自由ない暮らしをしたとするが、県知事には任期がある。また、県知事夫人というポジションと歌の技能は結びつくとは限らない点で、勸善懲悪性が失調している。

「明朝の望」(『秋田魁新報』一九〇四・一・一)は、三年前に死んだ父が今に晴れ着を持ってくと信じている六歳児の蝶が父が会いに来てくれた夢を見て、夢で父に会うことを明朝の望にする物語である。悲惨な児童を描く点で「目なし児」に通じる物語であり、夢見erことは問題解決にならず、いずれ破綻することが目に見える点で、非教訓的な救いがない物語である。

「蛍のゆくえ」(『愛国婦人』一九〇六・六)は、蛍狩りが大好きな新が捕まえる蛍が朝には消えるのは母・祖母が新が寝た後に逃がすからだが、新は蛍が朝に溶けると思っており、いつかは新がその智慧を誤りと見なすだろうという物語である。十文字氏は「女性の啓発を意図し、幼子を慈しむ姉や母親のあり方を描くことが主⁽¹⁰⁾」と説く。しかし、ここで注目するのはそれとは異なる観点である。新は「小理屈」をこねるがそれは正しい理屈ではなくやがて成長すれば改められるという無邪気な児童として描かれる。露を吸っているから蛍が朝日に溶けてしまうという母の発言を語り手は「面白い」というように、語り手は成人男性目線で物語世界を語っているのである。

一見、教訓性が後退・失調しているかのように見える物語が無色透明であるということはある。そこに駆動するイデオロギーが別のかたちをとって現れてきているだけなのである。児童を未熟・未完成なものとして位置づけ、そこからの成長が喚起される点では、たとえば救いのない「明日の望」も同様なのである。

5 苦難の克服

「めぐりあひ」(『愛子叢書第三編めぐりあひ』実業之日本社一九一三・八・三〇)は、横暴な父の没落によって母と離ればなれになった友吉が母の郷里に妹を伴いたどり着く物語である。いわば「母を求めてのささやかな冒険の旅を通して妹を連れた兄の成長を中心に展開されている⁽¹¹⁾」のである。「めぐりあひ」の動詞形「めぐりあう」は、「あれこれと遍歴したあとで思いがけず出会う。また、いろいろな経過をたどってやっと出会う」(『日本国語大辞典

第二版』) ことである。人生は旅であり、その旅という遍歴において様々な人々や出来事にめぐり会う。「めぐりあひ」では親に連れられて自分の意思とは無関係に上京したり父の故郷に向かう幼少時の旅に対し、父に見切りをつけ母の実家に向かった旅では学生らの支援はあるにしる意志的に行い、友吉が大人の男性に近づく点で通過儀礼である。

しかし、ここで注目したいのはそれとは異なる観点である。

父は、普段は横暴ではないが、酒が入ると人が変わり家族を手放す振る舞いを繰り返す。しかし、父は、泥酔した時の「そんなに阿母さんが恋しければ、独で阿母さんの傍へ行ってしまえ」という発言を除外して子供を排除しない。一方、父は、居眠りを始めたお清を見て友吉より先に毛布に包み、仕事が順調なときには友吉だけを遊びに連れて行き、正月に友吉がお屠蘇で酔ったときにはそれ以上飲まないように止め、自分の家の荒廃を自分の甲斐性の無さに帰着させるように、子供を思いやっていないわけではない。にもかかわらず、友吉は父から離れる。友吉と再会できたとき、母は「御父さんが、お前達を庇護って下さらなかったの。御父さんは矢張お酒ばかり飲んでいての」と言い、語り手の「友吉の御父さんは、矢張酒ばかり飲んでいてのでしょうか。それからの事は、余り友吉の耳へは入りませんでした」という結末の言葉も、飲酒が妻子との別れをもたらすイメージ操作である。

一方、母はどうだろうか。東京で出会った福子に対し、語り手は、「阿母さんがなくとも、福子さんは少しも不幸ではありませんでした」と語る。これは、語り手が母と幸福を結び付けていることを意味する。しかし、福子は新しい母を得たのちに上手くいかず、幸福ではないという噂が流れ、最後には継母と出会う前の家族構成に戻って暮らし、「楽しい月日を送って」る。福子への継母の仕付けの厳しさから母は「人事」と思えず友吉への父の仕付けを連想するように、友吉は母にとっても大事にされている。

しかし、友吉が幼稚園から帰宅すると、母は、本人ではなく、女中に幼稚園の様子を尋ねている。母は、「あの子は嫌とすると、学校が嫌ひぢやないでせうか」と、友吉に嫌なことを思い出させ、不快にさせないように、母は友吉に幼稚園の話を選んでいる。

また、母は、東京に引っ越してから、友吉の友達作りに助力している。母が「おとなしさうな」子供を選んで自宅に招くのは、友吉が家で「おとなしく遊んでる」る「体の弱い子」・「田舎育ちの臆病な子」であるためである。子供はお菓子が貰えるから友吉と遊ぶのであり、お菓子がなくなればすぐに去り、友達にはなれない。しかし、友吉は母親の助力がなくても「友達が一人二人出来て」いる。母の思いと友吉とはすれ違っている。

そして、母も「迎も御父さんが当になりさうもないところから、東京で何か職業を見つけて、自分独りの力で、子供の教育をしようと、思立」つが、友吉が母の実家を訪ねたのも、「お清を其処へ預け、自分は独り東京へ引返して、福子さんの御父さんにでも願って、奉公口を求める心算」であり、友吉は母親に甘える気はない。こうして母恋いの物語は瓦解する。前に言及した「瘤佐市」にしろ「めぐりあひ」にしろ、孤児もしくは家族から切り離された少年が苦難を乗り越える話である。父の不在ではなく母の不在によって少年は孤児的な、家族を持たない者になってしまう⁽¹²⁾。少年はやがて克己した結果、おそらくは新たな家族を形成し、再び家族制度に回収される。

では、なぜ友吉は苦難の過去を思い起こすのだろうか。

其時のお祖母さんの目にも、阿母さんの目にも、涙が一杯たまっていたことを、友吉は大きくなって、忘れることができませんでした。

祖母と母の涙は、単に別離の悲しさだけではない。でなければ最後の上京の時にも祖母は涙するはずだからである。涙は、父の元に戻っても、母が辛い思いをすることがまた繰り返されることを感じていたからである。友吉がそれを忘れられないのは実際に苦難・離縁が展開したからだけではあるまい。苦難を想起するのはそうした苦難が大人になった現在においても迫ることがあり得、それを回避しなければならないからである。友吉は、影響力をほとんど持たない幼い存在であり、家族という枠組みや社会の大きな流れに抗うことができない。しかし、無力な過去を悲しみ・涙として想起することで、今は自力で抗いうる友吉が喚起される。

6 終わりに

こうして成人男性とは異なる児童は、秋声の少女少年小説では、無力なあるいは誤った存在として表象されるが、同時にいずれはそれが打開・改善され有用で適切な存在になり得ることも内包することで、大人あるいは大人になり得る者に消費されていくのである。語り手の評価・表現が喚起する位置が常に成人男性であり、その視座から常に児童を限界を伴うものとして表象していくが、語り手の価値観は常に無謬のものとして再検討されることは物語においては起こらない。徳田秋声の少女少年小説においても大人、すなわち成人男性（さらにはその眼差しを内面化させた者）は自らとは異なるものとして児童像を安全な位置から表象し消費していくことが可能なのである。

しかし、こうした児童像の消費は何も児童文学前史の秋声にのみみられるわけではなく、児童文学の児童が代理表象である限り⁽¹³⁾、常に生起し続けている。

- (1) 徳田秋声「他の心理己の心理」(『新潮』一九一一・六)。
- (2) 小島政二郎『眼中の人』(三田文学出版部一九四二・一一) 参照。
- (3) 十文字隆行「秋聲の“子ども”」(『徳田秋聲全集27』八木書店二〇〇二・三) 二七〇頁。
- (4) 十文字前掲論二六八頁。
- (5) 無署名「解題」(『徳田秋声少年少女文学集』徳田秋声記念館文庫二〇一三・七) 二九一頁。
- (6) 注4に同じ。
- (7) 注4に同じ。
- (8) ハンフリー・カーペンター『秘密の花園』(こびあん書房一九八八・一) 参照。
- (9) 竹村和子『文学力の挑戦』(研究社二〇一二・五)は、孤児を「既存システムにまみれない「無垢」の象徴」(三一頁)でもあるとする。
- (10) 注4に同じ。
- (11) 注3に同じ。
- (12) 竹村前掲書一二頁参照。
- (13) 中村三春『物語の論理学』(翰林書房二〇一四・二)での小川未明童話の検討を参照。

(2015年5月8日受付)

(2015年7月13日受理)